

宮代町郷土資料館 開館二十周年記念

特別展

西光院

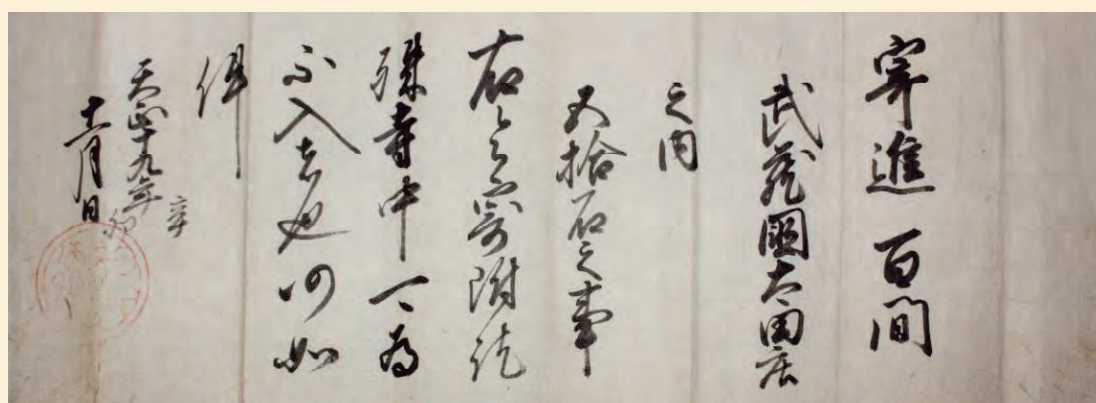
歴史と文化財



徳川家康画像



栗田口焼 茶碗



徳川家康朱印状

宮代町郷土資料館

埼玉県南埼玉郡宮代町西原二八九

TEL 〇四八〇一三四一八八二

FAX 〇四八〇一三二一五六〇一

開催にあたって

西光院は字東地内にある新義真言宗の寺院で、奈良時代の僧「行基」の草創と伝える町内屈指の古刹です。平安時代末期の安元 2 年(1176)に造られた国指定重要文化財の阿弥陀三尊像(現:(独)東京国立博物館寄託)を始め、中世の古文書や石造物、近世の朱印状などさまざまな史料が残されています。

安土桃山時代に中興開山「日雄」により今の宗門に改められましたが、その弟子に徳川家康の信任が厚く京都にある智積院の第 3 世を務めその基礎を築いた「日誉」(西光院第 2 世)と、新義真言宗における関東の触頭を務めた桶川市倉田の明星院住職の「祐長」という僧がおりました。西光院は、こうした著名な僧を輩出しています。

このような西光院につきましては、当館開館時に阿弥陀三尊像を展示・公開させていただきましたが、そのほかの文化財については一堂に公開されたことはありません。本年は宮代町郷土資料館開館 20 周年にあたりますが、記念すべき節目として本地域の中心的な寺院としての西光院の歴史や貴重な文化財について関係資料を展示させていただきました。本展示を通じて、一層郷土宮代に対する愛着と文化財の保護、保存に対する理解を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、西光院住職吉田照真様を始め関係の皆様の深いご理解とご協力のもと本特別展が開催できました。心より厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 10 月

宮代町郷土資料館

凡例

1. 本書は、平成 25 年 10 月 26 日から 12 月 23 日まで開催される、宮代町郷土資料館特別展「西光院 歴史と文化財」の展示図録です。
2. 展示の企画及び図録の執筆、編集、写真の撮影は、当館学芸員青木秀雄が担当しました。なお、古文書の解説の一部は当館学芸員河井伸一が担当しました。また、写真撮影等にあたっては当館学芸員横内美穂の協力を得ました。
3. 主な引用・参考文献
村山正榮 1934 『智積院史』
中央公論美術出版 1967 『日本彫刻史基礎資料集成』 平安時代 像造銘記篇 第 4 巻
徳永隆宣 1975 『智積院の興隆にみられる日誉の役割について』 密教学研究第 7 号
宇高良哲 1975 『近世初期の新義真言宗教団-特に智積院三世日誉を中心として-』 大正大学研究紀要 60
宇高良哲 1981 『倉田明星院祐長について-新義真言宗の触頭の変遷を中心として』 埼玉地方史 11
宇高良哲 1987 『徳川家康と関東仏教教団』
新井浩文 1992 『西光院』 さきたま文庫 41
吉川弘文館 1997 『国史大辞典』
岡 圭子 2011 『近世京焼の研究』
徳川記念財団 2012 『徳川家康の肖像-江戸時代の人々の家康観-』
4. 出品者、協力者(敬称略・順不同)
西光院、国立公文書館、(独)東京国立博物館、国土地理院、五社神社、吉田照真、島村圭一、中村誠二、新井浩文、長谷川清一、岩上孔昭、北村俊行、折原静佑、新井隆、小島明良

西光院の概要

西光院の概要

西光院は字東地内にある新義真言宗智山派の寺院で、奈良時代の僧「行基」の草創と伝える町内屈指の古刹です。平安時代末期の安元2年(1176)に造られた国指定重要文化財の阿弥陀三尊像を始め、中世の古文書や石造物、近世には歴代の将軍から寺領 50 石を与えられた朱印状や徳川家康画像、栗田口焼の茶碗を始めとする様々な史料が残されています。

また安土桃山時代、中興開山「日雄」^{にちおう}により今の宗門に改められましたが、その弟子に徳川家康の信任が厚く京都の智積院第3世を務めその基礎を築いた日誉(西光院第2世)と、その兄弟弟子で新義真言宗の関東の触頭^{ふれがしら}を務めた桶川市倉田の明星院住職祐長という僧がおりました。西光院はこうした著名な僧を輩出しています。

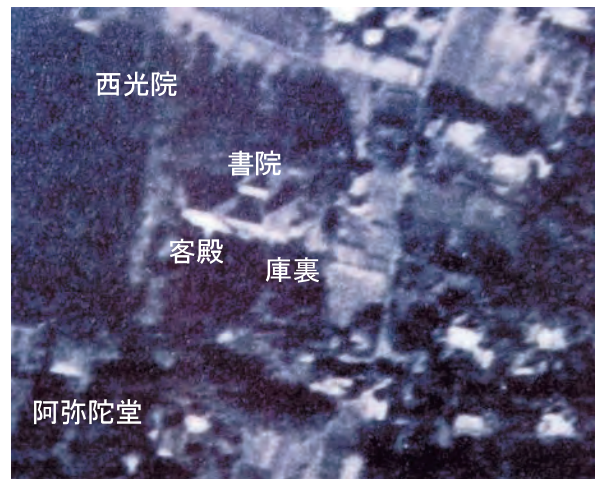
地形的には、西光院は標高 9m 余りを測る東西にのびる舌状台地の先端部付近にあります。南側は寺の前の道路付近まで谷が入り、北側はなだらかに台地が傾斜しています。門前にある五社神社付近は標高 11m を測り、町内で最も高い所となっています。こうした舌状台地をつらぬく道の両側に、西光院の塔頭^{たっちゅう} (坊) が数多く並んでいました。



現在の西光院



昭和 40 年代の西光院



西光院付近空中写真(昭和 22 年)

古代の西光院

古代の西光院

西光院はその伝承等によると、奈良時代に行基菩薩の草創と伝えられています。その後、「大同元年(806)に光福房(光福寺)初めて寺院となし法相華嚴兼学の宗旨として、弘仁11年(820)弘法大師東国遍歴の節にこの寺に滞在し、後に慈覚大師の中興により台蜜(天台宗)の道場となした」との伝承もあります。『新編武蔵風土記稿』には法相宗の大刹であったと記されています。

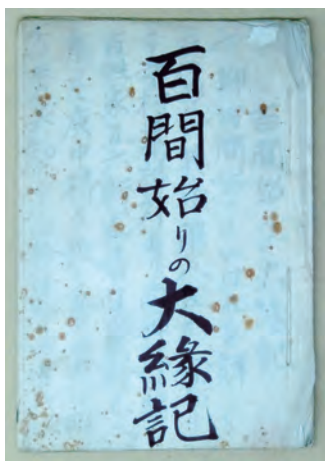
平安時代末期の安元2年(1176)には浄土信仰にもとづき阿弥陀三尊像が造られ、これを中心に百間山光福寺として確立していったものと考えられます。なお、この頃一帯は武蔵国太田荘として、鳥羽上皇の第三皇女八条院暲子(1137～1211)の所領(八条院領)でした。

縁起に見る西光院

元禄12年(1699)の「勸進帳」、寛政6年(1794)の「西光院殿宇再建立勸化状」、江戸時代後半に流布されたと考えられる「百間始りの大縁起」、明治40年(1907)山高龍観によりまとめられた「百間志料」などに西光院に関する縁起等が見られます。

こうしたいくつかの資料を見ていきますと、基本的に、行基菩薩が東国遍歴のおり、百間の地に立ち寄り、ここに老人が現れ行基菩薩に告げて阿弥陀の像を刻みお堂を建て、合わせて老人を五社神社に勧請してその守り神とするという構成となっています。また、安部仲丸(磨)という人物が建立にかかわることも共通しています。

おそらく元は一つの話で、いろいろな説話等と合わさり、また記した人や目的によってそれぞれの話が出来上がったものと考えられます。また、創建年代について神亀3年(726)や天平13年(741)という伝承も残されています。なお、『新編武蔵風土記稿』に「行基の草創にて安部清明開基せりなどみだりにいい伝えたれど、もとより抛とすべき事なし」と記されていますが、西光院の敷地内には行基にまつわる伝承も残されています。



百間始りの大縁起 (昭和14年写本)



杓掛地蔵(舟山地蔵)

行基が当所を訪れた時、杓をかけた場所に後世建立したと伝わる



行基塚(平成3年建立)

かつては阿弥陀堂の裏手にあったという



逆さ菩提樹

行基が持っていた杖を逆さに突き立て、それが根ざして大木となったという

阿弥陀三尊像

阿弥陀如来坐像(中央:像高 91.5cm)、観音菩薩立像(右:像高 104.5cm)、勢至菩薩立像(左:像高 103.8cm)からなる三尊像は、平安時代末期の安元 2 年(1176)に造られたものです。大正 3 年(1914)に国の重要文化財(当時は国宝)に指定されています。

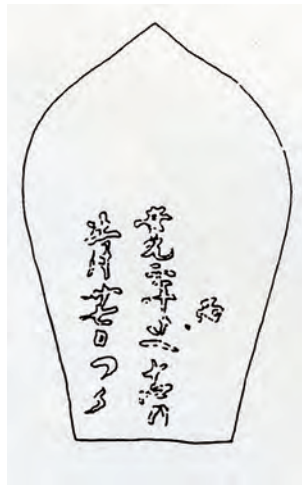
この阿弥陀三尊像は、平安時代中期以降、極楽浄土へ安楽を求める阿弥陀信仰が盛んになり、こうした信仰を反映して造られたものです。中央に阿弥陀如来、脇侍に観音菩薩、勢至菩薩を配し、十重の蓮華座を完備した数少ないものです。

ヒノキ材を用いた割矧造^{わりはぎくり}という手法で造られ、漆箔が施されています。全体的に穏やかでふくよかな丸みのある肉厚な形は、いわゆる定朝様式^{じょうちょう}とよばれる平安時代の特徴的な仏像です。地方仏師の手によるものと考えられており、当地方の定朝様式の基準作としても貴重なものです。

この三尊像は、大正 12 年(1923)の関東大震災によって被害を受け大正 15 年(1926)に修理が行われました。その結果、台座の蓮弁の一つに造像の年号が発見され、胎内には墨書銘があり室町時代の長祿 2 年(1458)に修理されたことが分かりました。

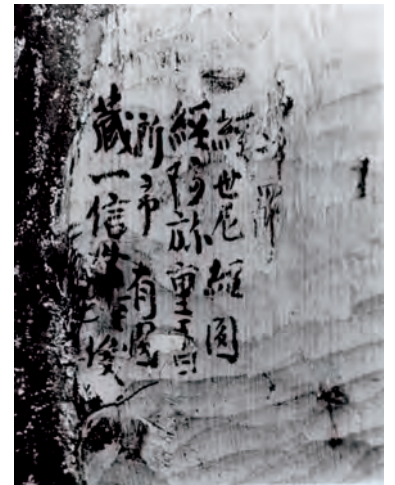


阿弥陀三尊像



阿弥陀如来台座蓮弁裏墨書

(『日本彫刻史基礎資料集成』より)



阿弥陀如来坐像膝裏墨書

(写真 東京国立博物館提供)

Image:TNM Image Archives

阿弥陀堂

阿弥陀堂はかつて西光院の道を隔てた南西側にあり、五社神社と並んで東向きに建てられた阿弥陀三尊像を祀る西光院の本堂でした。間口 3 間、奥行 4 間の茅葺の寄棟造りの建物でしたが、昭和 27 年(1952)の西光院の火災に伴い焼失してしまいました。しかし、焼失前に撮影された写真によってその様子を伺い知る事が出来ます。

写真によると、正面、側面とも 1 間ごとに太い柱で仕切り、上部に貫^{ぬき}を設けその上に組み物を施しています。それぞれの貫の先端には木鼻が見られます。正面中央に格子のある観音開きの戸が、その両脇は引き戸となっています。また、正面中央の上部には臺股^{かえるまた}が見られます(現存)。一方側面は、正面側の 2 間が引き戸となっており 3 間目の貫きの下部に細長の連子窓^{れんじまど}が造られています。建物の周囲には縁

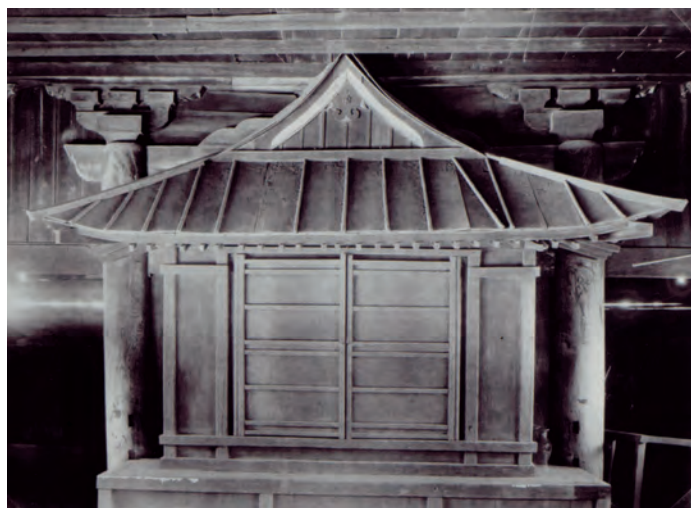


阿弥陀堂正面

をめぐらせています。内部は、内陣中央の須弥壇^{しゅみだん}の上に厨子^{ずし}が置かれ、阿弥陀三尊像が納められていました。須弥壇の奥に太い 2 本の柱とその上部に組物が見られます。なお、写真には写っていませんが、厨子の周囲にも古い仏像があったようです。

こうした建物の構造や、室町時代の長祿2年(1458)に阿弥陀三尊像が修理されていることなどから、この阿弥陀堂はその頃に建てられたものと推測されます。

なお、阿弥陀堂は源頼政の室(妻)菖蒲御前^{あやめ}の寄進により建立されたとの伝承もあります。



阿弥陀堂内陣



阿弥陀堂側面



阿弥陀堂側面（部分）

かえるまた
墓股

沢瀉の紋の施された墓股は、阿弥陀堂の正面中央の上部にありました。幅103.4cm、高さ33cmを測る大きなもので、墓が股を広げたような形をしているのでこのように呼ばれ、社寺建築に多く見られます。沢瀉は、オモダカ科の多年草で水田、沼畔などに自生しています。この沢瀉の紋は、その葉、花を図案化したものです。勝ち草とも呼ばれ中世武士に好まれたといわれています。

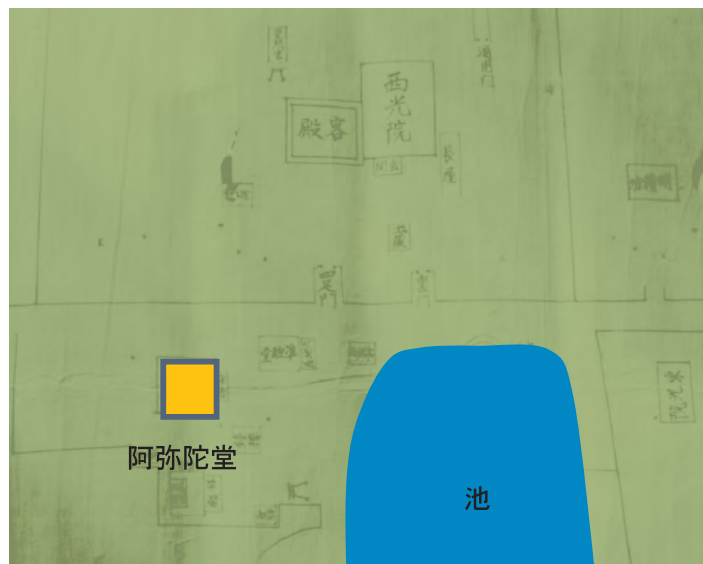


かえるまた
阿弥陀堂 墓股

阿弥陀堂付近の古景観

阿弥陀堂の創建当初の姿は全く分かりませんが、他の地域の古い阿弥陀堂等の例や地形等から推測すると、阿弥陀堂は東向きに建てられ正面に池が配されたいわゆる浄土庭園の景観が広がっていたのではないかと想像されます。

台地は阿弥陀堂の前から緩やかに東に向かって傾斜しており、その先にはかつて池之坊と呼ばれる所に弁財天を祀った弁天池がありました。弁天池付近は谷地形を呈しており、このあたりが大きな池ではなかったかと思われます。池にはハスなどが植えられ、極楽浄土の世界を彷彿させていたのではないのでしょうか。



阿弥陀堂付近の古景観(想像図)

中世の西光院

中世の西光院

鎌倉時代の西光院を物語る資料はありませんが、室町時代の長祿2年(1458)に阿弥陀三尊像が修理されたことが、阿弥陀如来坐像内の墨書から明らかとなっています。阿弥陀三尊像が納められていた阿弥陀堂もこの修理の際に建てられたものと推察されます。

一方、永正15年(1518)の石川県^{おいづるがたけ} 笈岳から出土した^{きょうづつ} 経筒のひとつに「太田庄光福寺」との銘が刻まれています。この光福寺とは西光院の寺号です。また、西光院の境外地にあった五社神社の北側に位置する雷電宮に懸けてあったという天文22年(1553)の^{わにぐち} 鰐口にも「百間山光福寺」と記されています。このように当時は、光福寺という寺号をもって呼ばれていました。

西光院という院号が初めて史料に登場するのは、永祿7年(1564)以前のもので推定される岩付城主太田資正判物写です。天文22年(1553)から永祿7年(1564)以前の間には寺号である光福寺から西光院に変わり、その後の史料には光福寺の^{たつちゅう} 塔頭の一つである西光院という院号が用いられています。なお、西光院には永祿13年(1570)の北条康成書状、天正14年(1586)の北条氏房判物が残され、それらの文書から西光院は当時岩付城の配下にあったことが分かります。また、西光院には貞治6年(1367)の^{ほうきょういんとう} 宝篋印塔や嘉暦4年(1329)、福德元年(1490)(私年号)等の板石塔婆など石造物も多く残されています。

^{ほうきょういんとう} 宝篋印塔と五輪塔

西光院には4基の宝篋印塔と2基の五輪塔があります。それぞれ完全な形のものはありませんが、宝篋印塔の1基には年号等が刻まれています。

正面に「逆修沙門聖華」「貞治丁未八月 時正」、右側面に「貞治丁未八月 時正」、左側面に「奉造立逆修聖華」とあります。干支から貞治6年(1367)8月に造られ、また「逆修」とあることから生前供養のために建てたものと考えられます。また、もう1基の宝篋印塔には光明真言が刻まれています。

なお、宝篋印塔は塔婆の一形式で、内部に「宝篋印陀羅尼」を納めたことからこのように呼ばれ、主に中世以降、石造物として造られました。五輪塔も塔婆の一形式です。西光院のものは全て塔上部の火輪の部分のみです。



宝篋印塔 貞治6年(1367)
(上部に五輪塔の火輪に乗っている)

^{いたいしとう ぽ} 板石塔婆

板石塔婆は、「板碑」、「青石塔婆」とも呼ばれ、本来供養のために建てられたものです。石材としては、秩父石ともいわれる^{りよくていへんがん} 緑泥片岩が用いられています。

西光院の板石塔婆は現在、西光院内に5基、墓地に約30基確認されています。その多くは破片ですが、年号が分かるものが10基ほどあります。最も古いものは嘉暦4年(1329)のもので、福德元年(1490)という私年号を用い

たものもあります。これらを含めて、1300年代が3基、1400年代が6基、1500年代が1基を数え、享禄2年(1529)に建てられたものが最も新しいものです。



板石塔婆 文明3年(1471)



板石塔婆 明応7年(1498)



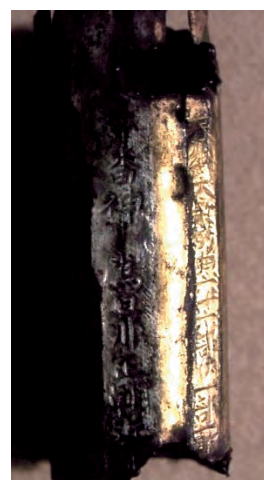
板石塔婆 福德元年(1490)



板石塔婆 永享9年(1437)

おいつるがたけ きょうづつ 笈 岳出土光福寺銘 経筒

明治38年(1905)8月、石川県の笈岳山頂で旧陸軍省参謀本部陸地測量部員による三角点設置作業中に発見された経筒2本のうちの一つで、「武州太田庄光福寺住僧 十羅刹女 本願実栄 敬白 奉納大乘妙典六十六部内一部所三十番神 為旦那正朝逆修 永正十五天戊寅今月日十覚坊」と銘が記されています。これによると、永正15年(1518)に光福寺の僧の実栄が旦那(施主)の正朝に生前供養を依頼され、六十六部聖(法華經六十六部を書き写して全国六十六州の霊場に1部ずつ納経する信仰に基づき、これを専門とする廻国の修行者)である十覚坊に託して、修験霊場である笈岳に埋納したものと考えられます。この経筒に刻まれた光福寺とは西光院の寺号です。



笈岳出土経筒(東京国立博物館所蔵) 永正15年(1518)

雷電宮鰐口

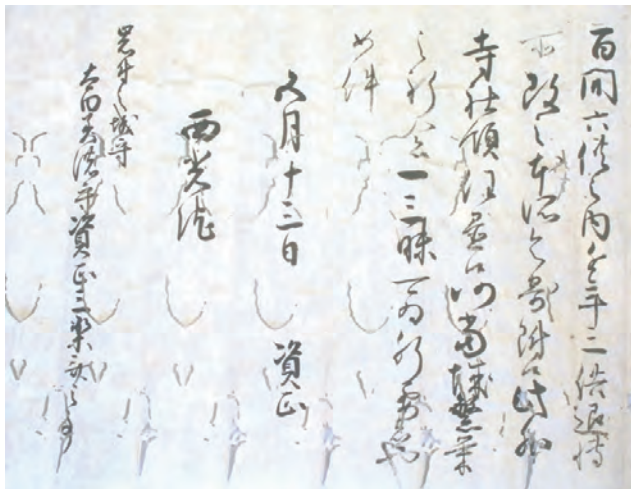
雷電宮は江戸時代の「西光院建前図面並坪数等之進上書」寛政2年(1790)等によると、五社神社の北隣にあった社です。『新編武蔵風土記稿』には雷電宮に懸けてあったという鰐口が載せられています。それによると「奉鑄鰐口武州太田庄南方百間山光福寺之内雷電宮当住也天文廿二年癸丑正月一日別当権少僧都祐信並神守」とあり、天文22年(1553)雷電宮の別当寺の権少僧都祐信と神守(主)により奉納されたものであることがわかります。この光福寺は西光院の寺号です。



雷電宮鰐口 天文22年(1553)
(『新編武蔵風土記稿』)
(国立公文書館所蔵)

すけまさはんもつ
太田資正判物写

岩付城主であった太田資正から西光院に宛て「百間の六か寺のうち廃寺となった三か寺の土地を寄付するので岩付城の繁栄を祈願するように」との古文書です。この古文書には年号が書かれていませんが、資正は永禄7年(1564)に後北条氏と通じた長子の氏資によって岩付城から追放されたので、それ以前の古文書と考えられます。なお、この古文書から寺号である光福寺からその塔頭の院号である西光院へと変わっています。



百間六供の内、近年三供退転の所
これを改め、本所寄附せしめ候、
この外(ほか)寺社領任せ置き候、
仍って当城繁栄の祈念、一三昧肝
要たるべきものなり、件の如し

西光院
五月十三日 資正

岩付之城主
太田美濃守資正三楽斎之事

やすしげ
北条康成書状

永禄13年(1570)神奈川県鎌倉市にあった玉縄城主であり、岩付城の城代であった北条康成(後の氏繁)の書状です。岩付の当番衆が西光院に乱暴をした場合、その者を小田原(北条氏政)に報告し重く罰することを証した文書です。後北条氏支配の一端を見ることの出来る資料の一つです。



百間の寺家中
当番衆狼籍を致す由、一段非
儀に候、自今以後において、
毛頭横合の人これあらば、交
名(きょうみょう)を注し承
るべく、小田原へ披露せし
め、急度重科に処すべく候、
その証文としてかくの如く
候、恐々敬白

永禄十三年庚午 北条善九郎
二月廿日 康成(花押)
百間西光院
同寺家中

うじふさ
北条氏房判物

天正14年(1586)岩付城主であった北条氏房から西光院宛に百間六か寺の所領の所有が認められた文書です。あわせて岩付城の繁栄を祈願するよう求められています。太田資正判物写と同種の文書として注目されます。



百間六供の事、前々の如く相違ある
べからず、本所その外寺社領任せ置
き候、永く異儀あるべからず、なお
当城繁栄の祈念、怠慢なく精誠抽ぜ
らるべきものなり、仍って件の如し

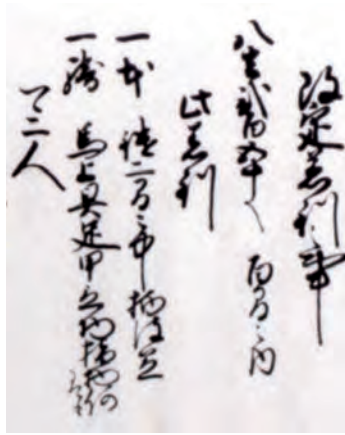
天正拾四年丙戌三月十一日氏房(花押)

西光院

うたのすけ 鈴木雅楽助念持仏

これは、後北条氏に仕えた鈴木雅楽助の念持仏と伝えられています。鈴木雅楽助については、元龜3年(1572)の北条家印判状写(武州文書)から、その知行地は「8貫250文 百間之内」で、軍役は「皮笠をかぶり2間半の槍を持った足輕侍1人と、馬上で甲冑を身に付け旗指物を背中に負った武将1人(1騎)の2人」ということが分かります。この馬上1騎というのが鈴木雅楽助であると考えられます。鈴木雅楽助は、天正15年(1587)に現在の群馬県前橋市石倉にある石倉城の小奉行(物頭)を命じられています。また、天正18年(1590)伊達房実判物写等からは、豊臣秀吉の小田原攻めに対する臨戦態勢の様子をうかがい知ることが出来ます。

天正18年(1590)岩付城は浅野長政等よりに攻められ落城しますが、この念持仏は、その戦で亡くなった鈴木雅楽助の子、鈴木日向守を弔うために造られた十一面観音像と伝えられています。なお、子孫の鈴木家には「鈴木氏由緒書」(鈴木日向守重門 軍功)が残されています。



北条家印判状写 抜粋(武州文書)

改定看到之事
八貫貳百五十文 百間之内
此着到
一本 鎧、二間々中柄・皮笠
一騎 馬上、具足、甲立物・指者何
にても
以上二人



鈴木雅楽助念持仏

けいそくじ 鶏足寺

鶏足寺は、栃木県足利市小俣にある真言宗の寺院です。大同4年(809)に創建され、中世には真言宗慈猛流^{じみょう}の全国総本山として山内に24院、48僧坊をもち、全国に310余りの末寺があったと伝えられています。

西光院も寛永10年(1633)の関東真言宗新義本末寺帳に「鶏足寺流」とあり、いつごろからかは明らかではありませんが、少なくとも室町時代には現在の足利市にある鶏足寺の末寺であったものと考えられます。ちなみに、西光院の紋は「二引両」と呼ばれる足利氏の紋となっています。



西光院の本堂に見られる「二引両」の紋



鶏足寺

百間之領本寺鶏足寺流
一 西光寺
御朱印有 寺領 五十石

『江戸幕府寺院本末帳集成』(昭和五十六年)より

一 西光寺 御朱印 五十石

江戸時代の西光院

江戸時代の西光院

『新編武蔵風土記稿』には、西光院は中興開山^{にち}日雄^おにより新義真言宗に改めたと記されています。日雄は「西光院世代書」等によれば「天正年中住職」とあり、慶長13年(1608)8月5日に没しています。その弟子には、徳川家康の信任が厚く京都にある新義真言宗智山派の総本山智積院第3世となった^{にち}日^よと、新義真言宗の関東の触頭^{ふれがしら}を務めた桶川市倉田の明星院住職^{めうちよう}の祐長^{ゆうちよう}がいます。なお、日^よは西光院の第2世も務めています。

西光院は、天正19年(1591)11月徳川家康から寺領50石と寺中^{ふにゅう}不入の朱印状が与えられました。以降、歴代の将軍からも朱印状が与えられています。また、徳川家康の画像と葵の紋入りの栗田口焼^{あわたぐちやき}の茶碗も日^よの頃に将軍家から拝領したと伝えられています。

寛永10年(1633)の関東真言宗新義本末寺帳には「百間之領 本寺鶏足寺流^{けいそくじ}」とあり、現在の足利市にある鶏足寺の末寺であったことがわかります。その後、おそらく1600年代後半には醍醐寺三宝院の末寺となったものと思われ、延享2年(1745)の武州百間西光院門末帳には「本寺醍醐寺三宝院」と記されています。寛政7年(1795)の寺院本末帳にも「本寺醍醐寺三宝院」とあります。

西光院は、その末寺、門徒を合わせて27か寺を数え、その範囲は西光院周辺を中心として現在の春日部市、杉戸町に及び、この付近の新義真言宗の中心的寺院であったことがわかります。

なお西光院は、寛政5年(1793)に火災により焼失し、文化2年(1805)に再建されています。



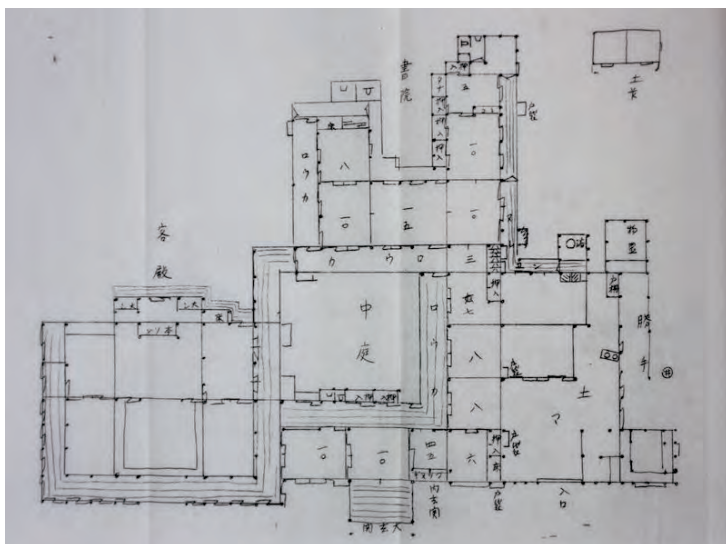
醍醐寺三宝院



西光院中興開山日雄の墓



西光院 昭和23年(1948)頃



西光院客殿・書院・庫裏等図面 大正14年(1925)

建前図面並坪数等之進上書

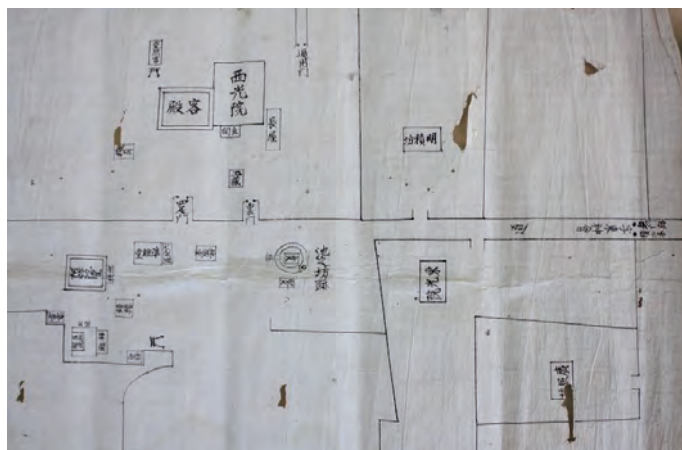
寛政2年(1790)に寺社奉行所に宛て提出されたもので、西光院周辺の字東から字中にいたる末寺、門徒、その境内、建物等の面積が詳細に記されており、当時の様子を詳しく知ることが出来ます。

東神会(東)から西神会(中)の間約1kmの道に沿い、西光院を中心として境外の阿弥陀堂、五社神社、鐘楼、雷電宮、池之坊跡、東光院等、さらに宝生院も記されており、多くの寺社が建ち並ぶ広い寺域を有していた寺院であることがわかります。また、東神会と西神会には「総門跡 榎二本」とそれぞれ記されており、かつて西光

院の東西に総門があったことが分かります。なお、現在一般的に東神会、西神会はそれぞれ「東神外」、「西神外」と表記されています。

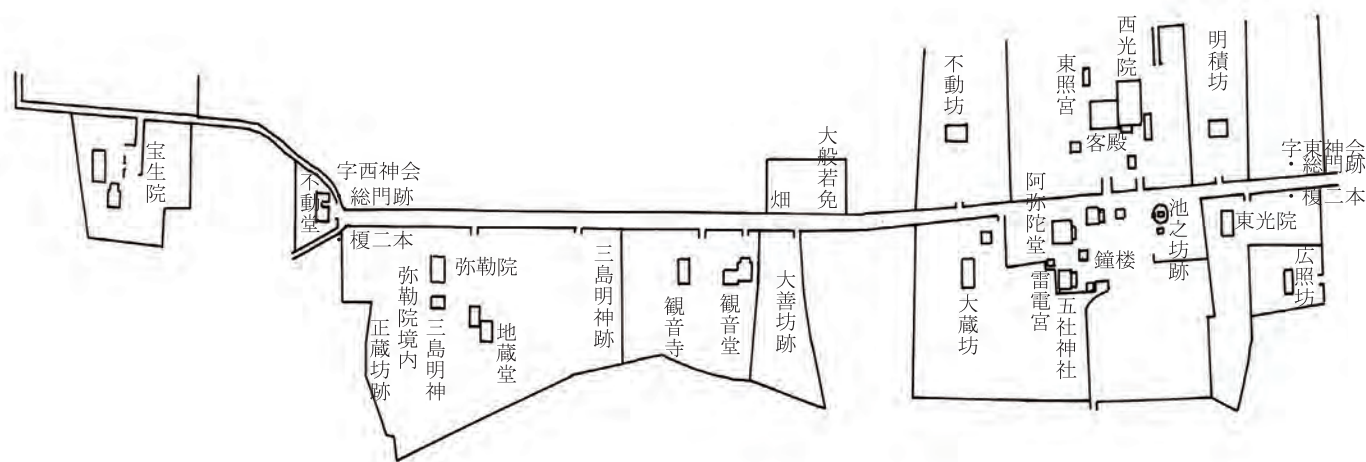


西神会付近



西光院付近

建前図面並坪数等之進上書 寛政2年(1790)



西光院伽藍配置図 (「建前図面並坪数等之進上書」より)

五街道其外延絵図 日光道中 (東京国立博物館蔵)

五街道其外延絵図 日光道中は、江戸幕府が日光街道の状況を把握するために道中奉行に命じて東海道、中山道、甲州道中、奥州道中とともに作成され、文化3年(1806)に完成したものです。この絵図には、各宿場の街並みや高札場、本陣など沿道の主なものが描かれるとともに、山川や付近の古跡、社寺なども丹念に描かれています。

西光院も粕壁宿から杉戸宿に至る社寺の一つとして、上空から斜めに見下ろした形式で立体的に描かれています。西光院の境内のお堂、東照宮、門、垣根、樹木等を始め、西光院付近を中心として前の道に沿って東から東光院、池の坊跡、阿弥



五街道其外延絵図 日光道中 (東京国立博物館蔵) 文化3年(1806)

Image:TNM Image Archives

陀堂、五社神社、雷電宮、不動坊、大蔵坊、天神社、観音寺、観音院、三島明神社等の社寺やそれらの垣根、樹木なども描かれています。また、高札場の場所や民家の家並みも描かれ、やや誇張されていますが地形の様子もうかがい知る事が出来ます。

西光院の末寺、門徒

延享2年(1745)の武州百間西光院門末帳には、末寺4か寺(医王院、海善院、明智寺、宝性院)、門徒23か寺(広照坊、東光院、明積坊、池之坊、大蔵坊、不動坊、大善坊、観音寺、弥勒寺、宝生院、青林寺、遍照院、宮崎房、地藏院、観音院、智明院、大聖院、青蓮院、正福坊、真蔵院、満福寺、西方院、香取坊)が記されています。海善院は中曽根村(春日部市)、宝性院は杉戸町(杉戸町)、門徒の観音院、智明院は内牧村(春日部市)、真蔵院は杉戸町(杉戸町)、満福寺は三本木村(杉戸町)、西方院は並塚村(杉戸町)、香取坊は倉常村(春日部市)で他は全て町内です。一方、寛政7年(1795)の寺院本末帳には末寺7か寺、門徒20か寺を数え、新たに青林寺、宝生院、大聖院が門徒から末寺として明記されています。他は同じです。このように西光院の末寺、門徒は、西光院周辺を中心として現在の春日部市、杉戸町に及び、この付近の新義真言宗の中心的寺院であったことがわかります。



武州百間西光院門末帳

なお末寺とは本寺から法流を相伝した寺院で、本寺に付属し剃髪^{ていはつ}の作法等や檀家の葬式の導師を行える寺院ですが、門徒とは法流を相伝しない寺院で、基本的に葬式等については行う事が出来ない寺院のことです。

西光院出身の僧「日誉」^{にちよ}

日誉は、安土桃山時代～江戸時代前期の真言宗智山派の僧侶で、智積院^{ちしやくいん}第3世、西光院第2世を務めました。諱^{いみな}は日誉、日祐、字は正純、弘治2年(1556)に小野寺氏の子として生まれ、15歳で西光院の日雄のもとで剃髪し、17歳で紀伊国根来寺に上り、日秀、頼玄^{ねいごろうじ}について修学をしました。天正13年(1585)の羽柴秀吉による根来寺焼き討ちにあい高野山に逃れ、後に西光院檀徒に請われて西光院に入住しましたが、間もなく大和国(奈良県)長谷寺で修学しました。慶長11年(1606)に長浜(長浜市)総持寺に入り、同17年(1612)11月には京都の智積院(新義真言宗智山派総本山)の第3世能化^{のうけ}(住職)となりました。翌18年には駿府(静岡市)の徳川家康の前で御前論議を行いました。

日誉の活躍によって元和元年(1615)には智積院は300石の寺領の加増を受け合わせて500石とし、さらに豊臣秀吉が建立した祥雲寺の寺域の半分を賜り、智積院の基礎をつくりました。寛永8年(1631)に弟子の元寿に跡を譲り報恩寺に隠居し、寛永17年(1640)11月20日に85歳で没し、京都泉涌寺^{せんいんじうじ}に葬られました。

なお、兄弟弟子には新義真言宗の関東の触頭^{ふれがしら}を務めた桶川市倉田の明星院の祐長がいます。また、門下には大和国長谷寺の秀筭、江戸円福寺の俊賀等がいます。



智積院



智積院にある日誉の墓



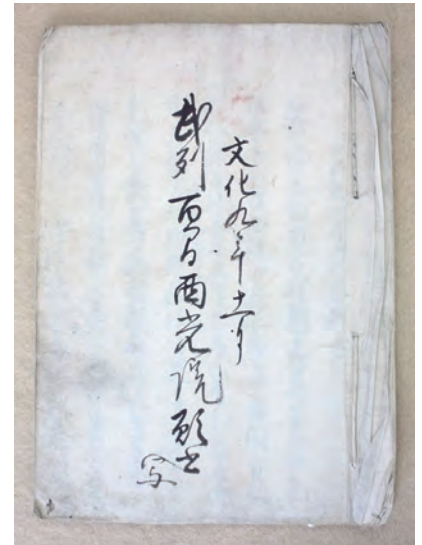
長谷寺



泉涌寺

西光院願書

この願書は、文化9年(1812)に記されたもので、寺格が変わってしまったので昔の通り戻してほしいとの願いを寺社奉行所宛てに提出した文書です。智積院にも同様の文書が残されているようです(『智積院史』)。具体的には大半を日誉の事績について記し、「西光院は徳川家康の信任の厚かった智積院第3世日誉の出身の由緒ある寺院であり、日誉へ寺領50石と寺中不入の朱印状を頂きました。年頭の御祝いの際には登城して将軍家に御祈祷の御札を奉獻し、乗輿御免、独御礼(登城して単独で御礼を言う)を務めてきた寺柄でした。しかし初瀬方(長谷寺、豊山派)より4代の住職が入り、その後西光院住職を巡って争いがあり、その結果英光(第18世)が智積院より入りましたが、いつの間にか総御礼になっていましたので元のように年頭御礼、御祈祷御札献上、乗輿御免、独御礼等、並に智積院、真福寺、圓福寺、大護院交代の際にはそれらの住職の入札(公選)等は関東11壇林同様をお願いいたします」といったものです。この文書の年号から見て、おそらく第23世真空が記したものと考えられます。



武州百間西光院願書写 文化9年(1812)

勸進帳

この勸進帳は、元禄12年(1699)西光院住職宗彬(第13世)の弟子大蔵坊秀応によって記されました。内容は、西光院の縁起をもとに行基ゆかりの五社神社が荒れ果ててしまったが、別当寺(西光院)にも建立するだけのたくわえや力もないので、額の多少にかかわらず様々な人々に対し再建の寄付を呼び掛けているものです。

五社神社本殿は、文禄・慶長期(1592～1615)に建てられたといわれている五間社流造の建物です。内部は一棟等間隔に仕切られ、それぞれに御神体として丸い箱に鏡と仏像が納められており、これらの御神体の鏡や箱には元禄14年(1701)5月の銘があります。勸進帳の年代と御神体の銘文は同時期で、この勸進帳によって集められた資金により改修が行われたものと推察されます。なお、御神体の一つには宗彬の銘の入ったものもあります。



五社神社本殿



西光院第13世宗彬の銘がある五社神社御神体和鏡

西光院殿宇再建立勸化^{かんげじょう}状

この勸化状(埼玉叢書 第三卷所収)は、寛政 5 年(1793) 1 月 27 日に西光院が火災により焼失してしまったため、再建の願を立てもとの姿に復興しようとしたけれども自力で行う事が出来ないので、多くの人たちに寄進を募った文書です。焼失した翌年、寛政 6 年(1794) 1 月に西光院住職尊明(第 22 世)が記しました。本状にも「西光院勸進帳」と同様に行基菩薩以来の縁起、由緒等が記されています。なお、折原家文書によれば、文化 2 年(1805)2 月 15 日にこの勸化状を記した尊明が再建したとあります。

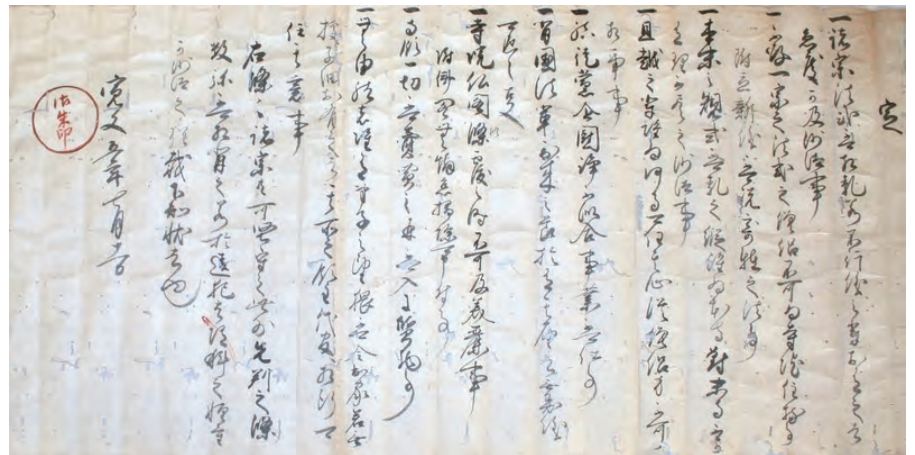


文化2年(1805)に再建された西光院

定(諸宗寺院法度写)

寛文5年(1665)幕府は、寺院統制のため各宗派に仏教寺院、僧侶全体に共通の寺院法度を出しました。これはその写しです。

内容は「各宗の法式を乱すことのないよう守ること、一宗法式を知らないものは寺院住持となることは出来ないこと、本末の制度を厳正にする、寺院仏閣の修復の制限、寺領の売買、質物の禁止」など9か条に渡って記されています。第4代将軍家綱の時に出されたものです。



諸宗寺院法度写 寛文5年(1665)

西光院朱印状

朱印状とは印判状の一つで、一般には戦国時代以降花押の代わりに朱印を捺した公文書をいいます。特に織田信長以降、政治法令的な文書に用いたため政治的な効力が大きくなりました。江戸時代、将軍が公家や武家、寺社の所領を与える際にも発給されました。

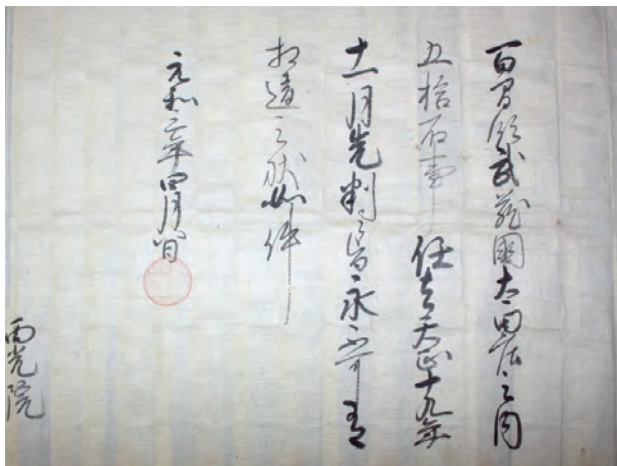
西光院には、歴代の将軍が発給した50石の寺領と寺中不入^{ふにゅう}を認めた朱印状12通が残されています。欠いているのは第6代将軍家宣、第7代将軍家継、第15代将軍慶喜です。家宣、家継の治世は合わせて8年足らずで終わり、慶喜は幕末動乱期にあつてそれぞれ発給されていませんので、将軍から発給された全ての朱印状が残されていることになります。

最初の朱印状は天正19年(1591)11月の徳川家康から寺領50石と寺中不入を認めたもので、「福德」の朱印が捺されています。第2代将軍秀忠の朱印状は元和3年(1617)に発給され、天正19年の先判の旨とあり「忠孝」の朱印が捺されています。第3代将軍家光も天正19年、元和3年の先判の旨とあり、朱印は「家光」と捺され、以下歴代将軍の朱印状にはその名が捺されています。第2代将軍秀忠から第5代将軍綱吉の代までは以前の発給年月日を全て記し「先判之旨」となっていますが、第8代将軍吉宗の時から「当家先判之例」として簡略化されています。また、家光の代まで朱印は年月日の下に捺されていますが、第4代将軍家綱の時から年号の横に捺されるようになっていきます。

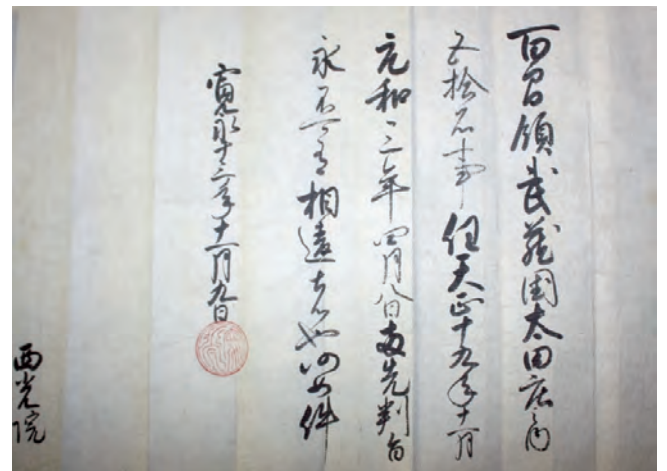
明治初期、朱印状は政府によって回収等されたなかで、徳川家康をはじめとして歴代の将軍が発給した全ての朱印状が完全な形で残っているというのは非常に少なく貴重です。



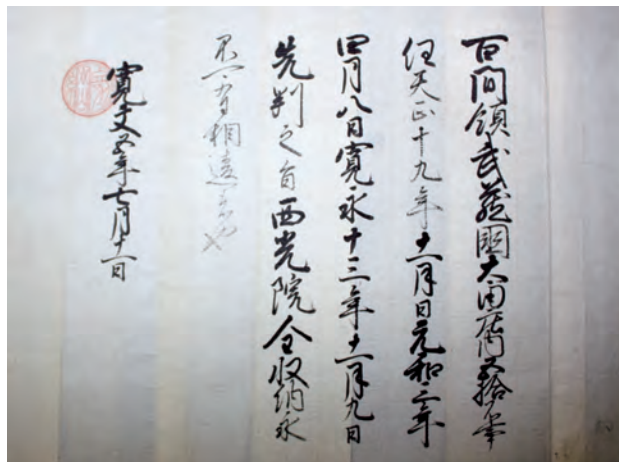
徳川家康朱印状 天正19年(1591)



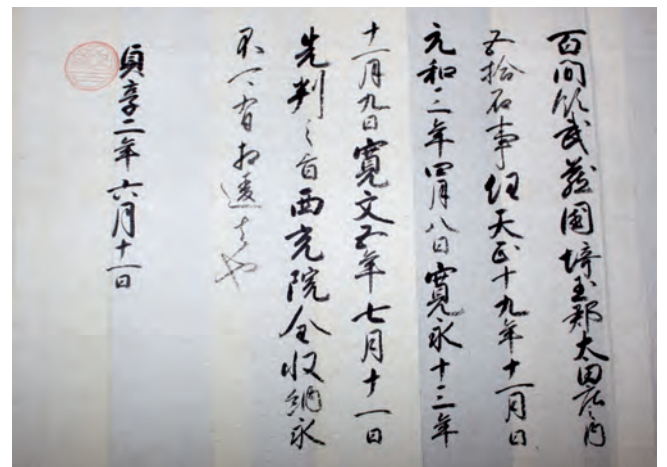
徳川秀忠朱印状 元和3年(1617)



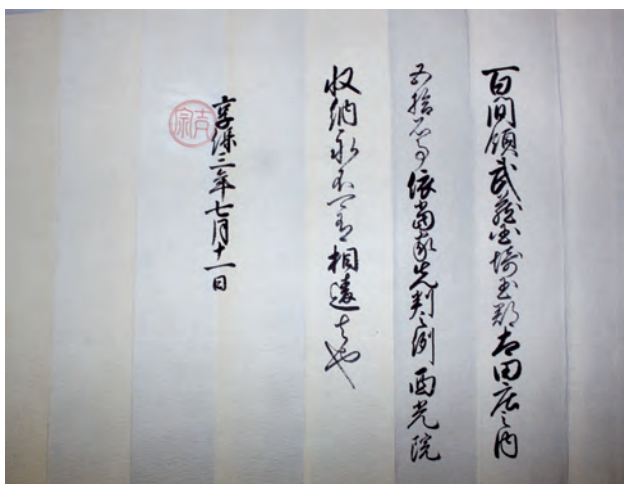
徳川家光朱印状 寛永13年(1636)



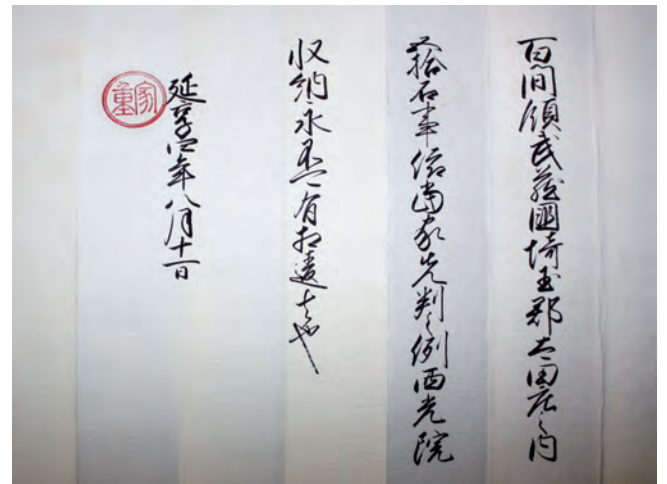
徳川家綱朱印状 寛文5年(1665)



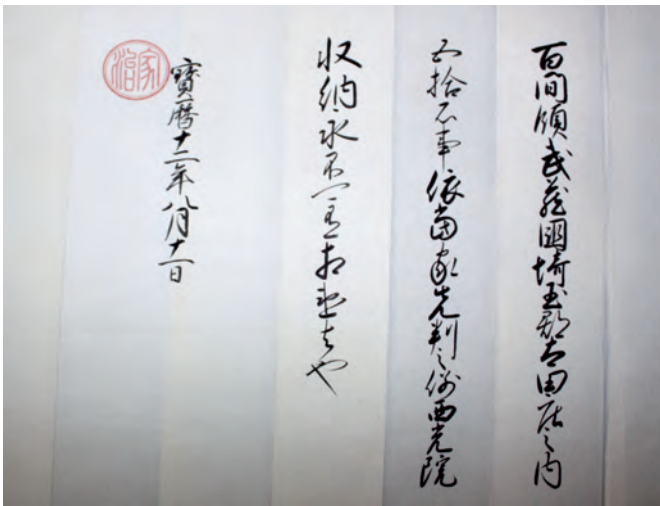
徳川綱吉朱印状 貞享2年(1685)



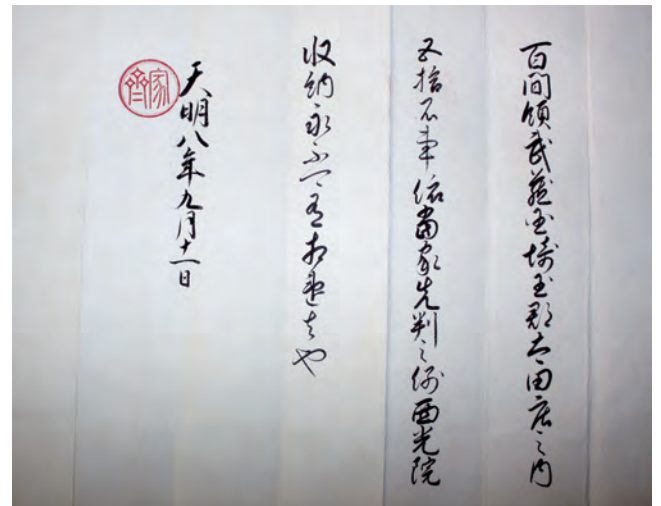
徳川吉宗朱印状 享保3年(1718)



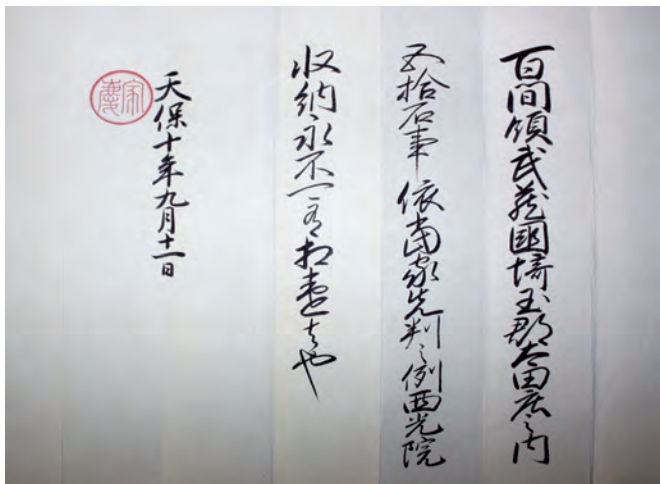
徳川家重朱印状 延享4年(1747)



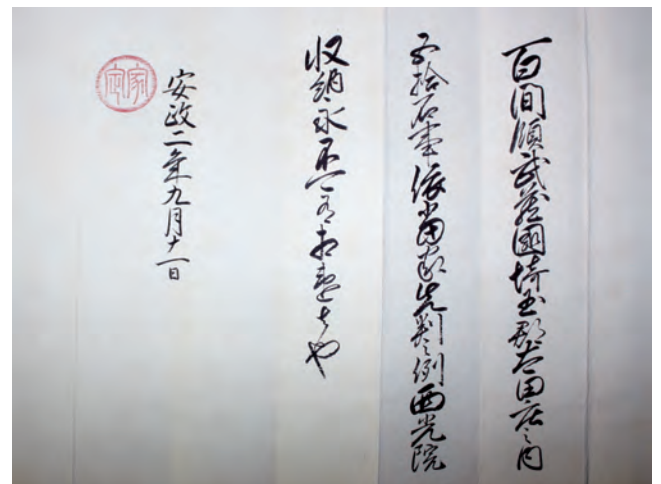
徳川家治朱印状 宝暦12年(1762)



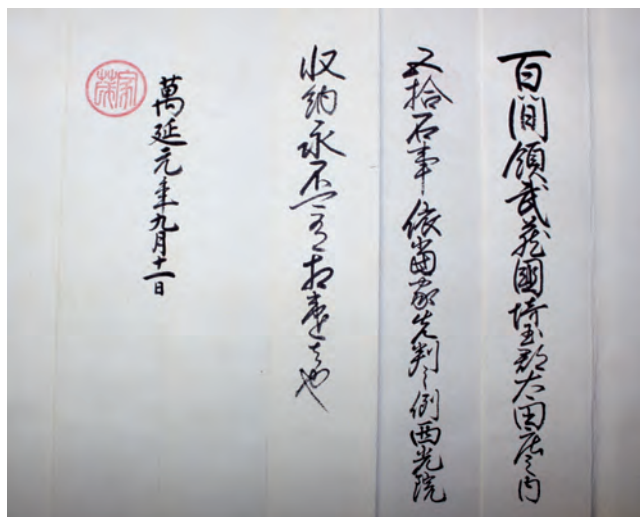
徳川家斉朱印状 天明8年(1788)



徳川家慶朱印状 天保10年(1839)



徳川家定朱印状 安政2年(1855)



徳川家茂朱印状 万延元年(1860)



御朱印箱



御朱印蔵 (平成12年)

徳川家康画像

西光院にあった東照宮の御神体として祀られていたもので、東照大権現として神格化された、いわゆる神像としての徳川家康の画像です。

冠をいただき、葵紋様をあしらった黒の束帯に身を包み、笏^{しやく}を右手に持って太刀を^は佩き、^{うんげんべり}纏^{あげだたみ}縷^{とぼり}縁^{みす}の上^{とぼり}に右斜めに座している姿が描かれています。ふつくらとした顔には細かなしわが描かれ、目は上目づかいに描かれています。頭上には御簾の下に帳を絞^{みす}りあげ、5つの葵の紋が描かれています。下部は一对の狛犬と縁側欄干が描かれるという定型的な神殿装飾となっています。また家康像の背後には、瀧や老松等の山水画が描かれています。

掛け軸の一文字には葵唐草の文様が、風帯等にも葵の文様をあしらい、周囲には輪宝の図柄が散りばめられています。縦148.9cm、横50.1cmを測り、画像部分は縦79.3cm、幅40cmを測る絹本に着色されたもので、本紙上に風帯、一文字、画像等全てを書き込む「描表装^{かきびょうそう}」と呼ばれる方法で描かれています。

この画像は狩野派の作と伝えられており、寛政3年(1791)に上野輪王寺仏画師第7代神田宗庭貞信によって修理されています。

なお、この徳川家康画像が祀られていた東照宮は、昭和27年(1952)の西光院の火災の時まで存在していました。



徳川家康画像

覚（徳川家康画像修復覚書）

この文書は徳川家康画像を入れた箱の中にあったもので、「家康画像一幅を修理に出したところ、いうことなく注文の品を確かに受け取りました、亥五月三日武州百間村西光院 御絵所神田宗庭殿」とあり、修理に出した画像の受取の控えと思われます。

一方、この画像の箱の蓋の内側に「東照宮御絵像 東叡山御絵所宗庭御修復調進」とあり、貞信の印があります。この貞信とは上野輪王寺仏画師第7代神田宗庭貞信（1765～1800）のことです。貞信の活躍した年代から推定してこの文書に記された亥年は寛政3年（1791）と考えられ、この年に西光院の徳川家康画像が修理されたものと思われます。



覚（徳川家康画像修復覚書）

画像箱蓋の内側の墨書



栗田口焼茶碗

栗田口焼茶碗（葵紋入り茶碗）

乳白色の地に正面と裏面の2か所に葵の紋を、その間に葦と思われる絵が描かれています。高台の内側には「栗田口」の印が捺されていることから、現在の京都府東山区栗田口（三条通り界隈）で焼かれたものであることが分かります。

栗田口焼は、寛永元年(1624)頃尾張の瀬戸から来た三文字屋九右衛門(九左衛門)が作り始め、三代将軍の頃に將軍家の御用を務めていたといわれています。以降、18世紀中葉まで御用窯を務めていました。

この茶碗は日誉の頃に徳川家康画像とともに將軍家より拝領したと伝えられています。



栗田口印

明治時代以降の西光院

明治時代以降の西光院

明治時代になると、西光院には新たな展開が見られました。

明治元年(1868)11月当時の本寺である醍醐寺三宝院より、醍醐寺院家跡宝菩提院の兼帯を命じられました。それにともない醍醐寺三宝院から西光院に対して「菊桐紋付紫幕」と「同紋付燈灯」が寄付され、「色衣」の着用、「赤網乗輿」、「金紋挾箱」の使用許可が与えられました。同時に醍醐寺での席次札も与えられています。この結果、西光院は三宝院配下の有力寺院としての性格を強めました。廃仏毀釈運動(神仏混淆禁止)が広まった直後のことであり、西光院にとっては有利な展開であったようです。西光院第24世真祐(天保9年～明治2年)の時でした。なお、西光院は明治18年(1885)9月から京都智積院の末寺となっています。一方、明治6～8年(1873～1875)に西光院を校舎として学校(現百間小学校)が置かれ、明治7年には進修学校と称されました。

その後、昭和14年(1939)10月から同18年まで粕壁女学校(現県立春日部女子高等学校)の「観心寮」が寺内に置かれました。昭和27年(1952)12月火災により客殿等が焼失しましたが、本堂を千葉県流山から、庫裏は埼玉県知事公舎をそれぞれ移築し現在に至っています。

観心寮

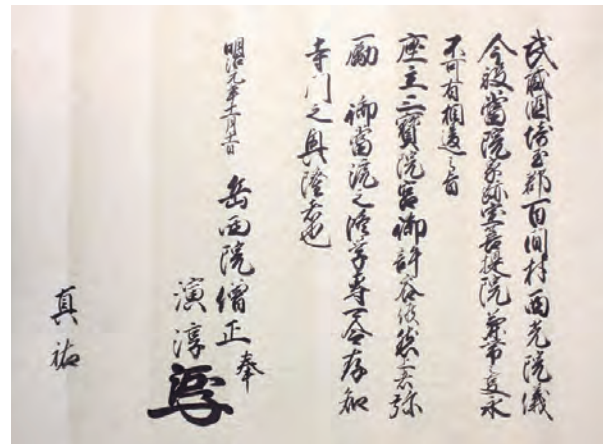
西光院に昭和14年(1939)から同18年(1943)にかけて置かれた粕壁女学校(現埼玉県立春日部女子高等学校)の寮です。現在も西光院境内に開寮記念碑が残っています。修練の場として、ふとん、食料など持ち寄りの合宿生活で、座禅や住職の話を聞き、学習の時間は講話が多く「これからの日本女性」という話しを先生方がされたそうです。戦時中のことであり農家の農作業等の手伝いもおこなったようです。(『向日葵 創立70周年記念誌』 埼玉県立春日部女子高等学校 引用・参考)



西光院門前の観心寮の生徒たち



西光院内部の観心寮の学習の様子
(『向日葵 創立70周年記念誌』より)



三宝院宮令旨(院室兼帯許可) 明治元年(1868)



席次札(表、裏) 明治元年(1868)

西光院歴代住職

西光院は、中世末期に日雄^{にちおう}を中興開山第1世として第2世日誉(京都智積院第3世)、第3世圓祐と続き現住職まで28世を数えます。日雄は根来寺、その他の多くの住職は智積院で修学し直接あるいは他の寺院を経て西光院の住職となっていますが、第14世は江戸の護持院、第15～17世は根生院^{こんしょういん}の命により住職となっています。また歴代の住職の中には幕府の命で江戸弥勒寺に住み、寛文6年(1666)8月後水尾法皇が智積院運 敝僧正に命じて催した仙洞論議に参加している僧、第6世精(清)長もいます。また、弥勒院にある延宝8年(1680)の庚申塔には第9世光箒^{うんしょう}の^{せんとう}名が、元禄12年(1699)の五社神社修理のための勧進帳や元禄14年(1701)の五社神社御神体の和鏡の一つに第13世宗彬の名が見られます。また、西光院殿宇再建立勸化状は第22世の尊明が記しています。

歴代住職一覧

僧 名	房 号	事 跡	住 職 歴
1.日雄		根来寺住山 天正年中住職	住職歴 36 年
2.日誉	正純房	智積院第 3 世、智積院中興	住職歴 22 年
3.圓祐	正順房	日誉弟子、元和年中(1615～1624)より住職	
4.宥誉	能印房	京都智積院住山、西光院坊中の弥勒院より入院	住職歴 14 年 ※寛永 14 年(1637)～慶安 3 年(1650)
5.宥鏡		京都智積院住山、下総国吉川村延命寺より入院	住職歴 8 年 ※慶安 3 年(1650)～明暦 3 年(1657)
6.精長	清忍房	京都智積院住山、同寮舎より入院	住職歴 10 年 ※明暦 3 年(1657)～寛文 6 年(1666)
7.栄秀	順堯房	京都智積院住山 武州太田吉羽村密蔵寺より入院	住職歴 3 年 ※寛文 6 年(1666)～寛文 8 年(1668)
8.祐雄	能音房	京都智積院住山 下総国倉常村香取坊より入院	住職歴 8 年 ※寛文 8 年(1668)～延宝 3 年(1675)まで
9.光箒	宗忍房	京都智積院住山 奥州最上花蔵院より入院	住職歴 5 年 ※延宝 3 年(1675)～延宝 7 年(1679)
10.宥長	了性房	京都智積院住山 武州三保谷村廣法寺より入院	住職歴 7 年 ※延宝 7 年(1679)～貞享 2 年(1685)
11.惠覚		京都智積院住山 武州平須賀村宝聖寺より入院	住職歴 2 年 ※貞享 2 年(1685)～貞享 3 年(1686)
12.英長	俊忍房	京都智積院住山 西光院坊中大蔵坊より入院	住職歴 2 年 ※貞享 3 年(1686)～貞享 4 年(1687)
13.宗彬	教遍房	京都智積院住山 武州高野村長福寺より入院	住職歴 21 年 ※貞享 4 年(1687)～宝永 4 年(1707)
14.尊栄	見了房	長谷小池坊住山、西光院末寺海善院より入院	住職歴 1 年 ※宝永 4 年(1707)
15.尊阿	宣傳房	長谷小池坊住山、粕壁町真蔵院より入院	住職歴 3 年 ※宝永 4 年(1707)～宝永 6 年(1709)
16.亮海	是春房	長谷小池坊住山、武州足立壺丁目村西光寺より入院	住職歴 18 年 ※宝永 6 年(1709)～享保 11 年(1726)
17.尊海	宅舎房	長谷小池坊住山 長谷寮舎より入院	住職歴 28 年 ※享保 11 年(1726)～宝暦 7 年(1757)
18.英光	隆海房	京都智積院住山、同寮舎より入院	住職歴 4 年 ※宝暦 7 年(1757)～宝暦 10 年(1760)
19.本寂	高音房	京都智積院住山 同寮舎より入院	住職歴 5 年 ※宝暦 10 年(1760)～明和元年(1764)
20.宥全	普照房	京都智積院住山 同寮舎より入院	住職歴 5 年 ※明和元年(1764)～安永 4 年(1775)
21.秀専	純浄房	京都智積院住 中嶋村医王院より入院	住職歴 3 年 ※安永 4 年(1775)～安永 6 年(1777)
22.尊明	義観房	京都智積院住山 坊中内大蔵坊より入院	住職歴 32 年 ※安永 6 年(1777)～文化 5 年(1808)
23.真空		京都智積院住山	住職歴 31 年 ※文化 5 年(1808)～天保 9 年(1838)
24.真祐		天保 9 年戊辰より住職	住職歴 31 年 ※天保 9 年(1838)～明治 2 年(1869)
25.真覚		明治 2 年 2 月(21 日)中より住職	住職歴 41 年 ※明治 2 年(1869)～明治 43 年(1910)
26.真栄		明治 43 年 5 月 1 日より住職	住職歴 15 年 ※明治 43 年(1910)～大正 14 年(1925)
27.真也		大正 14 年より住職	住職歴 48 年 ※大正 14 年(1925)～昭和 48 年(1973)
28.照真		現住職	昭和 48 年(1973)～現在に至る

(「西光院世代書」等より)